

本源的思考としての対称性による互酬概念の考察 —サードセクターの根幹をなす経済原理の探求—

はじめに —ヨーロッパ型サードセクター論における互酬—

「サードセクター」とは、一般的に「政府・行政(ファースト)セクター」「営利企業・市場(セカンド)セクター」とも異なる経済領域を指す。しかし、国際的にみれば、このサードセクターに関する共通認識がなされているとはいえない。各国の研究者が、それぞれにおける国家の歴史や研究基盤をもって多様な議論を行っているのが現状である。

アメリカにおいて、サードセクターが経済学的関心に基づいて研究されたのは、B・ワイズブロード(Weisbrod, 1975)によるものが始まりとされている(向井, 2015)。その後、ジョンズ・ホプキンス大学の研究プロジェクトをもって、サードセクター論の国際的共通認識の構築が試みられた(Salamon and Anheier, 1995)。しかし、その研究プロジェクトでは、サードセクターの主体として非営利組織しか対象とされておらず、利潤非分配制約をもたない協同組合などは対象外となっていた。

この研究プロジェクトの動向を受け、ヨーロッパでは、EMES(エメス)¹と呼ばれるサードセクター研究者ネットワークが、ヨーロッパ独自の視座に基づくサードセクター論の確立を目指したのである。ヨーロッパにおけるサードセクター論は、協同組合や共済組合もサードセクターの対象とされている。それはヨーロッパにおいて、長年研究、蓄積されてきた「社会的経済(*économie sociale*)」の議論に基づいたものであった。

アメリカ、ヨーロッパ双方のサードセクター論を整理すると、様々な相違が確認できるのだが、その中でも、ヨーロッパ型サードセクター論において確認できる互酬概念の存在は、アメリカ型サードセクター論との差異を一層際立たせるものである。ヨーロッパ型では、ポランニーによる3つの経済原理[互酬、再配分、(市場)交換]に関する議論をふまえたうえで、サードセクターとは経済の3極部面がハイブリット化されるところにその特質があるものとされている(Evers, eds, 2004 訳 p27)。非貨幣経済としての互酬を基盤として、市場経済と非市場経済としての再配分がハイブリット化されているところにサードセクターの意義が見出されるのである。そのため、互酬に関する視座は、ヨーロッパ型サードセクター論の本質を探求するうえで欠かせないものであると考える。

本報告ではまず、ヨーロッパ型サードセクター論における互酬の議論で引用されているポランニーの互酬概念の整理を行う。そして、ポランニーの互酬概念において欠くことのできない概念、対称性(symmetry)に関しての考察を行う。そこから導き出される結論は、対称性こそが、互酬の基盤を成すものであるということである。ポランニーの議論をふまえ、対称性に基づいた互酬に関する議論の必要性を確認し、これからのサードセクターを展望するうえでの一里塚となることが本報告の目的である。

¹ EMESの由来は、このネットワーク形成のきっかけとなった欧州委員会宛1996年報告書のタイトル「L'Emergence Des Entreprises Sociales」の頭文字からきている。

1. ポランニーによる互酬概念の提起

カール・ポランニー(Karl Polanyi 1886-1964)は、ハンガリー出身の社会学者である。大著『大転換(The Great Transformation)』(1944)や共編著『初期帝国における交易と市場(Trade and Market in the Early Empires)』(1957)、遺著『人間の経済(The Livelihood of Man)²』(1977)など、「社会における経済の位置」という視点から、市場社会の危機とファシズム台頭との関連や、市場社会と人間の自由との関係を議論し、自由を効率の犠牲にしない産業社会の可能性を追求する著作を残している(若森, 2015)。そしてポランニーは、市場経済の特殊性を明らかにするための比較分析のツールとして、文化人類学の先行研究などを基に、互酬概念の提起を試みるのである。以下からは、2つの著作における互酬の議論を整理し、ポランニーによる互酬の意義をみることにする。

1-1. 『大転換』の互酬概念

ポランニーは、『大転換』の第4章「社会と経済システム」の文中において互酬概念の提起を試みている。『大転換』は、19世紀に先行する伝統的諸社会の経済についてのポランニーによる独創的見解、および18世紀末から19世紀初めのイギリスに勃興した自己調整的市場経済の伝統的諸社会への浸透と、それがもたらした破壊的作用をめぐる彼の洞察が記された代表作である。その中でも第4章は、市場の存在しない「自然で生来的な伝統的諸社会」における経済を、互酬、再配分、家政、(市場)交換という4つの原理³を提起したうえで、モデル化を試みた章として重要な意義をもつものである(野口, Polanyi, 2009 訳者あとがき)。

『大転換』では、西メラネシアのトロブリアンド諸島島民の生活を例に互酬(reciprocity)の提起が試みられている。しかし『大転換』ではまだ、人類学的事例をもって互酬の存在を提起するにとどまっておらず、互酬に関する詳細な規定は行われていない。ここでは、互酬に関するいくつかの要素の確認を行い、概要の把握に努めることにする。

まず互酬の対象に関してだが、それは以下の文から確認できる。「互酬は主として社会の血縁的な組織、すなわち家族と親族において作用する(Polanyi, 2001 訳 p83)。」ここでは、血縁関係内における互酬の存在が提起されている。また、血縁関係内ということから、個人間を想定していることも確認できる。

互酬の発現条件については、以下の文を確認することとする。「互酬の機能は、無文字民族にしばしば見られる社会組織上の特徴である対称性(symmetry)という制度パターンによって、大いに助けられる(Polanyi, 2001 訳 p84)。」ここから、互酬が対称性という概念と関係があることが確認できる。

1-2. 「制度化された過程としての経済」の互酬概念

つぎに、「制度化された過程としての経済(The Economy as Instituted Process)」における互酬の議論を確認する。この論文は、1957年に刊行された共編著『初期帝国における交易と市場』に収められている4論文のうちの1つである⁴。この論文は、経済の原始時代から今日までの歴史のある特定の時期についてだけでなく、人類の文明史全体を通じて分析するための、包括的な分析概念を提示しようと試みた論文である(玉野井, Polanyi, 1957 はしがき)。「制度化された過程としての経済」では、主要な統合パターンとして、互酬、再配分、(市場)交換が提示されている。この論文にて、それぞれのパターンは以下の

² 『人間の経済』は、ポランニーの死後、イロナ夫人からの依頼を受け、ハリー・W・ピアスンが編者となって刊行された。

³ ポランニーの後年の著作では、家政を除く3つの原理をもって議論を行っている。

⁴ 「制度化された過程としての経済」は、他9編のポランニーの論文と合わせて邦訳『経済の文明史』(2003)に収められている。

ように定義されている。

互酬とは、対称的な集団間の相対する点(個人、集団の双方を想定するための表現であると考えられる)のあいだの移動を指す。そこで互酬は、対称的に配置された集団構成が背後にあることを前提とする。再配分は、中央に向かい、そしてまたそこから出る占有の移動を表す。再配分は何らかの程度の中心性が集団のなかに存在することに依存する。(市場)交換は、ここでは市場システムのもとでの「手」のあいだに発生する可逆的な移動のことをいう。(市場)交換が統合を生み出すためには、価格決定市場というシステムを必要とする(Polanyi, 1957 訳 p374)。

この論文において、『大転換』では提起するにとどまっていた各パターンの定義化が試みられている。しかし、互酬の定義を確認すると、「対称的な集団間」というところに不明確な部分がみられる。『大転換』、「制度化された過程としての経済」の双方における互酬の記述をみるかぎり、対称性は互酬がパターン化するうえで欠かせない概念であることが確認できる。しかし、この対称性という概念が、具体的にどのようなものを指すのかという点についての明確な記述は見出すことはできなかった。この対称性という概念に関する考察は次章に預けることとして、ここでは、「制度化された過程としての経済」の文中にみられる、対称性に関する視座を確認することとする。

ここで注目すべきは「個人における互酬行為は、対称的な親族集団のシステムのような、対称的に組織された構造が存在する場合にのみ経済を統合する(Polanyi, 1957 訳 p375)」という記述である。これまでポランニーがたびたび提示している対称的な集団とは、主に親族血縁関係を前提としたものであった。しかしここにおいて、親族血縁関係のみならず、このような対称的に組織された構造の存在を提示している。つまり対称的な集団とは、親族血縁関係に限らないということがここから考えられるのである。

そしてポランニーによる以下の記述は、対称性を考察するうえで重要な示唆を与えてくれると考える。

「アリストテレスは、あらゆる種類のコミュニティ(コイノニア)に対応して、成員間に一種の善意(フィリア)が存在し、それは互酬関係(アンティペポントス)として現れると説いた。…これをわれわれの用語でいいかえれば、より大きな共同体のなかには多重の対称性が発達し、その対称性にしたがって下位の共同体では互酬行動が発達する傾向がありうるということである(Polanyi, 1957 訳 p378)。」

ここから、対称性の概念は、アリストテレスによるフィリアの概念と類似するものであるとの考察が可能となる。次章からは、これを引き継ぎ、アリストテレスのフィリア概念を俯瞰したうえで、対称性に関する考察を行うこととする。

2. 互酬概念における対称性の意義

「フィリア(philia)」という用語は一般的に、日本語では「友愛」、英語では「friendship」と訳されるが、アリストテレスが提起しているフィリアは、これらの語で表される関係よりも広いものである。そこには親と子、主人と奴隷、客と店員、支配者と国民といった関係が含まれ、それを通じて社会的な人間関係が追求されているのである(菅, 2016)。また、ポランニーはフィリアの英訳を「good will」としている。そのためポランニーの邦訳文献では、フィリアは「善意」と訳されている。

2-1. アリストテレスによるフィリア概念

アリストテレスは、『ニコマコス倫理学(Ethica Nicomachea)』の第8巻、第9巻でフィリアに関する議論を行っている。そこでフィリアは、「善きもの(アガトン)」「快適なもの(ヘーデュー)」「有用なもの(クレシモン)」の3種に区分されている。まず「有用なもの」、「快適なもの」に関しては、次のように説明されている。

「有用のゆえにお互いを愛するひとびとは、相手かたを相手かた自身に即して愛するのではなく、自己にとっての或る善が相手かたから与えられるかぎりにおいて相手かたを愛している。快樂のゆえに愛するひとびともまた、これと同様である。たとえば機知的なひとびとを愛しているのは、彼らは何らかかくかくの人物であるということのゆえにではなくして、自分にとって彼らが快適だからにすぎない。(第8巻第3章 1156a 訳 p71)」

ここで挙げられている2種のフィリアは、自己に対して得や快樂を与える者に結ばれる友好関係として表れるものである。それに対し「善きもの」は、その性質を大きく異にしており、「究極的な性質のフィリア」と呼ばれている。「善きもの」に関する説明は以下の通りである。

「究極的な性質の愛(フィリア)は、善きひとびと、つまり卓越性において類似したひとびとのあいだにおける愛である。けだし、かかるひとたちのいずれもひとしく願うところは「善きひとたるかぎりにおける相手かたにとっての善」なのであるが、相手のひとびとは彼ら自身に即しての善きひとびとなのである。しかるに、相手かたにとっての善を相手かたのために願うひとびとこそが、最も充分な意味における親愛なるひとびとたるのでなくてはならない。(第8巻第3章 1156b 訳 p72-73)」

この究極的な性質のフィリアは、お互いに相手のために善きものを願う関係として表れるものである。すなわち、相手にとっての善いことを望む一方で、相手も自分に対して善いことを望んでいると双方が認識している関係性をもって究極的な性質のフィリアは表れるのである。また、これらのフィリアはいずれも「等しさに基づく者同士」、つまり「上下関係にない者同士」に現れるということにも注意する必要がある(菅, 2016)。これらアリストテレスによるフィリアの概念をふまえて、次からは、ポランニーが提起する対称性の考察を行なうこととする。

2-2. 対称性に関する考察

まず、ポランニーがフィリアをどのように捉えていたのかということ考察するうえで、ポランニーによるフィリアの英訳が1つの手掛かりとなる。先にも述べたように、ポランニーはフィリアの英訳として、一般的な「friendship」ではなく、「good will」をもちいて議論を展開している。この点から、ポランニーはフィリアにおける「愛」としての要素ではなく「善」としての要素を強調していたことがうかがえる。すなわち、先の3区分における「善きもの」としてのフィリアを主と捉えていたと考えられるのである。

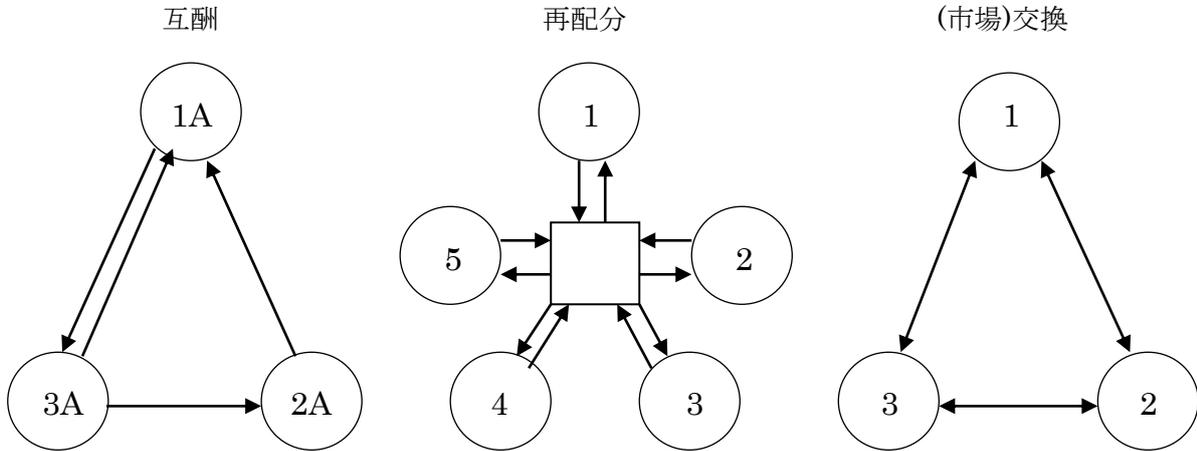
前述した議論をふまえ、ポランニーは、対称性を「善きもの」としてのフィリアと類似する概念であるとみていたのではないかと考察できる。

すなわち対称性とは、以下の2つの認識に基づくものであると筆者は考える。

- ①相手のために行う一方で、相手も自分のために行うということが双方で認識されている。
- ②関係性として対等であると双方で認識されている。

そして、対称性が認識された関係の間で行われる財・サービスの移動を互酬と呼ぶのである。つまり、

互酬を規定するものは対称性に基づく関係性であって、非貨幣交換や贈与と返礼が無条件で互酬に区分されるとは限らないのである。これらの議論をふまえ、互酬、再配分、交換を図式化したものを以下に記載する。



この図において、矢印は財・サービスの移動を示すものだが、それと同時にアルファベット「A」をもって対称性に基づく関係性の存在を提示している。当然ながら、個人(集団)としてそれぞれは別の存在である。しかし、そこに対称性が認識された関係性があることによって互酬が行われることをアルファベット「A」は示している。再配分においても、中心を「□」とすることで、その他の個人(集団)と対等ではないことを表している。(市場)交換においては、互酬や再配分にみられる関係性は存在せず、財・サービスの移動における双方の関係性はあくまで契約関係のみである。

おわりに ー現代における互酬とはー

以上のような、ポランニーによる互酬の議論をふまえると、サードセクター論における互酬の意義を確認することができる。それは、サードセクターの基盤には、他者との対称的な関係性が必要不可欠であるということである。この点に関して、ポランニーは興味深い記述をしている。「なぜ経済の領域では、多くの場合、特定の制度的な前提条件のないところでは、個人間の行為が期待された社会的効果を上げないのかという点を説明する助けとなるはずである。対称的に組織された環境においてのみ、互酬的行為は何らかの重要性をもった経済制度を生む。(Polanyi, 1957 訳 p377)」このようにポランニーは、対称性が認識された組織が基盤となることの重要性を説いているのである。すなわち、相互扶助と対等の精神に基づいた組織基盤が構築されることで、互酬は意義を持つものとなるのである。これらの議論をふまえ、現代における互酬的組織としての当座の要件として、以下の3点を提示したい。

- ①需要を同じくする者の組織 (相手と自分が、具体性をもって対称的であると認識できる要件)
- ②需要者が供給にも関わる組織 (対称性の喪失を防ぐことにつながると考えられる要件)
- ③民主的取り組みが行われている組織 (対称性を認識し、構築するための手段としての要件)

そして、これらの要件は、筆者がこうした研究を行なうきっかけとなった J-L.ラヴィル(Jean-Louis. Laville)の議論(特に社会的企業に関する議論)と共通する部分が多いといえる。ラヴィルによる社会的企業論では、フランスの現状分析を行ったうえで、大きく分けて 2 つの分野における事業活動に焦点が当てられている。1 つは労働市場から排除されている人々の参入を促す事業の分野であり、もう 1 つは近隣サービス(*services de proximité*)の分野である。ラヴィルいわく、「近隣サービスとは、互酬性の推進力を元に需要と供給とが結合して構築されるサービスであり、市場の原理と再配分の原理との組み合わせを通じて強化されるもの(Laville, 2007 訳 p116)」である。ラヴィルは、互酬に基づいた事業の意義を近隣サービスという概念を提起し、追及しているのである。ラヴィルは近隣サービスを提供する社会的企業の具体的事業例として、父母参加による保育所や在宅支援の企業組織の研究を行っている(Laville, Borzaga, ed, 2001)。

筆者も現在、日本における民間共同学童保育の動向に注目し、研究を行っている。それはラヴィルが近隣サービスという概念を提起したことや、ヨーロッパ型サードセクター論が多元的経済に基づく議論を展開したことと同様、現代における互酬に基づいた経済を展望するための試みの 1 つなのである。本報告は、それにむけての予備的考察なのである。

【参考文献】

- Aristoteles. *Ethica Nicomachea*, Bywater, I., Oxford, 1894. (高田三郎訳 [1973] 『ニコマコス倫理学 (上)(下)』岩波文庫)
- Borzaga, C. and Defourny, J. (ed.) [2001] *The Emergence of Social Enterprise*, London: Routledge. (内山哲郎他訳 [2004] 『社会的企業 雇用・福祉のEU サードセクター』日本経済評論社)
- Defourny, J. and Monzón, J.L.C. (eds) [1992] *Économie sociale Entre économie capitaliste et économie publique*. (富沢賢治他訳 [1995] 『社会的経済 近未来の社会経済システム』日本経済評論社)
- Evers, A. and Laville, J.L. [2004] *The Third Sector in Europe*. (内山哲郎他訳 [2007] 『欧州サードセクター 歴史・理論・政策』日本経済評論社)
- Laville, J.L. (eds.) [2007] *L'économie Solidaire Une perspective internationale* (北島健一他訳 [2012] 『連帯経済 その国際的射程』生活書院)
- Polanyi, K. [1957] *The Economy as Instituted Process*, (eds) C. M. Arensberg, and H. W. Pearson, Glencoe, Illinois, The Free Press. (石井溥訳 [2003] 「制度化された過程としての経済」『経済の文明史 第十章』ちくま学芸文庫)
- Polanyi, K. [1977] *The Livelihood of Man*, (ed.) by H. W. Pearson, Academic Press. (玉野井芳郎他訳 [2005] 『人間の経済 I・II』岩波書店)
- Polanyi, K. [1944] *The Great Transformation*, New York, Farrar and Rinehart, Paperback, Boston, Beacon Press. (吉沢英成他訳 [1975] 『大転換—市場の形成と崩壊』東洋経済新報社)
- Polanyi, K. [2001] *The Great Transformation: The Political and Economic Origins of Our Time*, Foreword by J. E. Stiglitz with a New Introduction by F. Block, Boston, Beacon Press. (野口建彦他訳 [2009] 『[新訳]大転換—市場社会の形成と崩壊』東洋経済新報社)
- Salamon, S.M, and Anheier H.K. [1995] *Defining the nonprofit sector*, Manchester, Manchester University Press.
- Weisbrod, B. [1975] Toward a Theory of the Non-profit Sector in a Three Sector Economy, in Phelps, E. (ed.) *Altruism, Morality, and Economic Theory*, Russell Sage.
- 菅豊彦 [2016] 『アリストテレス「ニコマコス倫理学」を読む 幸福とは何か』勁草書房
- 向井清史 [2015] 『ポスト福祉国家のサードセクター論 市民的公共圏の担い手としての可能性』ミネルヴァ書房.
- 若森みどり [2015] 『カール・ポランニーの経済学入門 ポスト新自由主義時代の思想』平凡社.